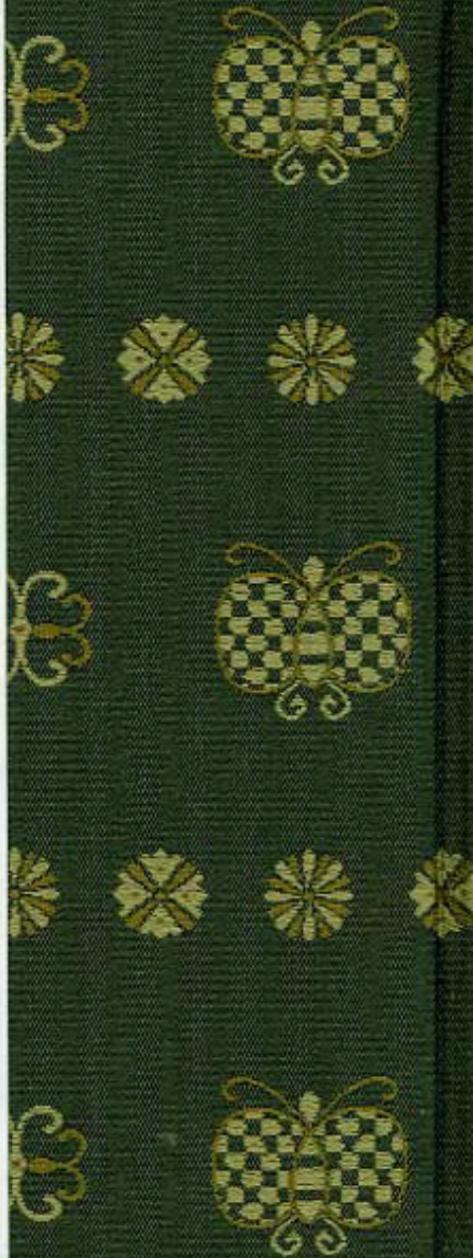


瓦

つ

内藤系つ句集



瓦

つ

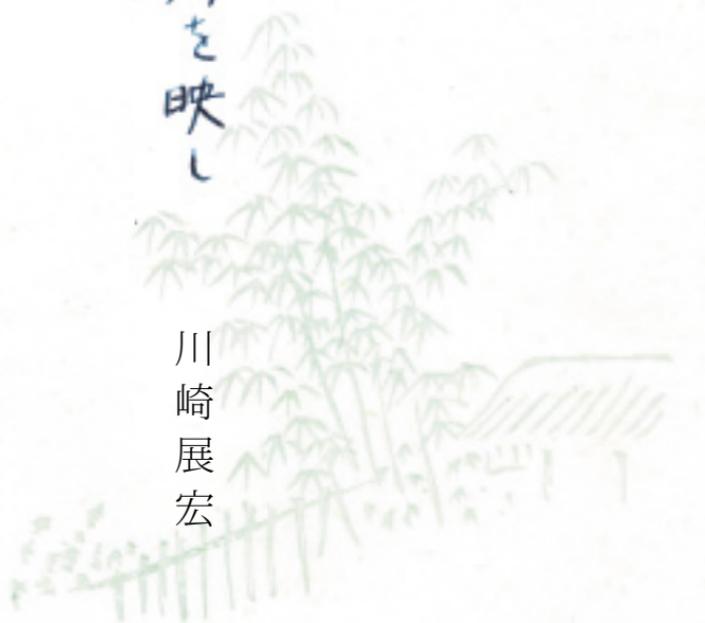
内藤えつ句集

題字 高島茂

序
句

冷酒の
コップ
新宿の
灯を映し

川
崎
展
宏



目次

序句 川崎展宏

一月 7 《大波》

二月 23 《光琳梅花》

三月 33 《棒霞》

四月 47 《花筏》

五月 65 《細渦》

六月 75 《紗綾型》

七月 99 《散り蓮華》

八月 121 《抱き茗荷立涌》

九月 133 《小秋草》

十月 153 《銀杏の丸》

十一月 173 《露芒》

十二月 179 《影日向雪輪》

編集後記 佐藤喜孝

題字 高島 茂

地文様 〔京からかみ〕より

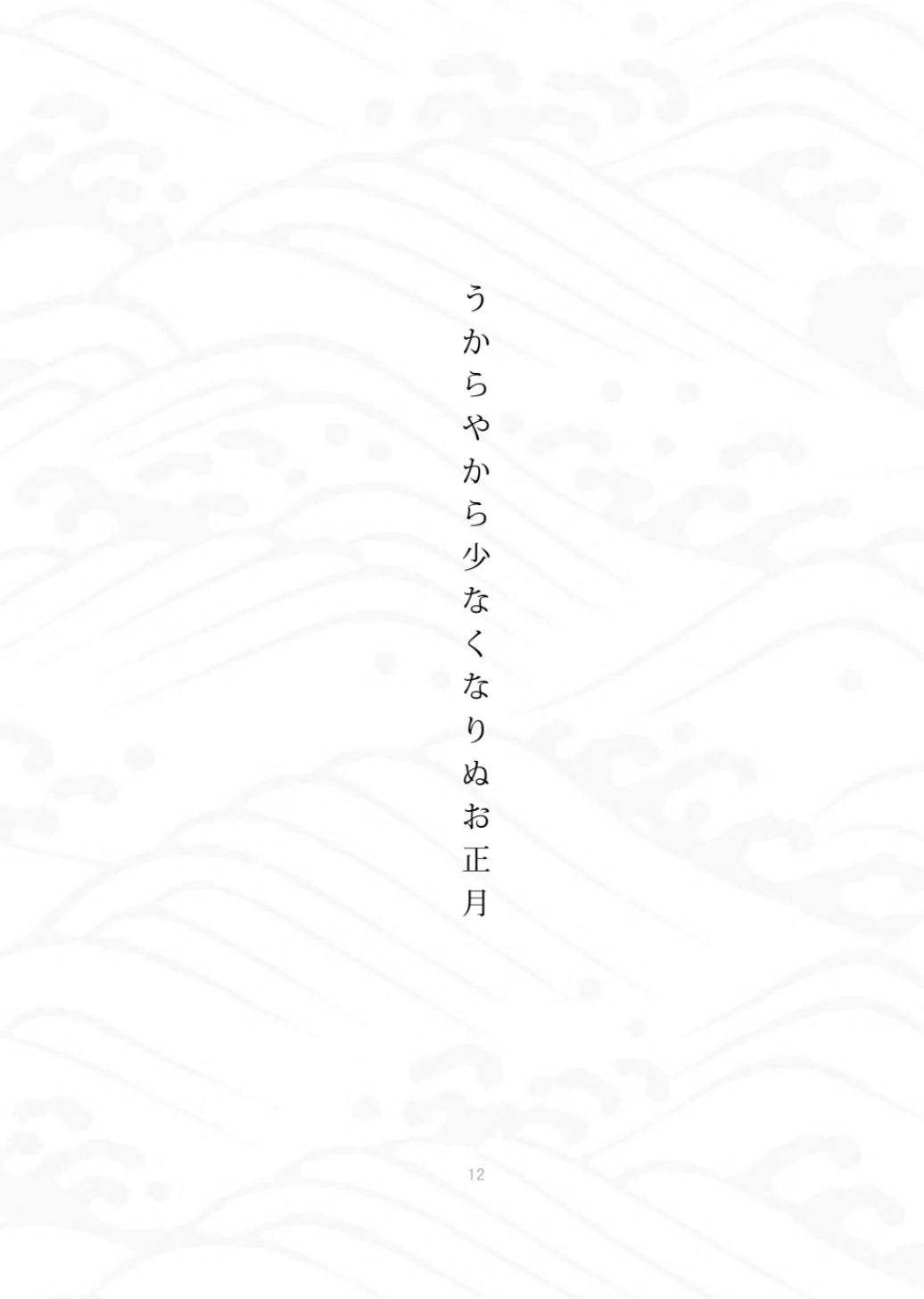
~~_____~~

月

屠蘇を飲む少年ほろと酔うたらし

元
日
の
不
機
嫌
な
顔
洗
ひ
け
り

警
官
が
檻
に
入
り
し
初
詣



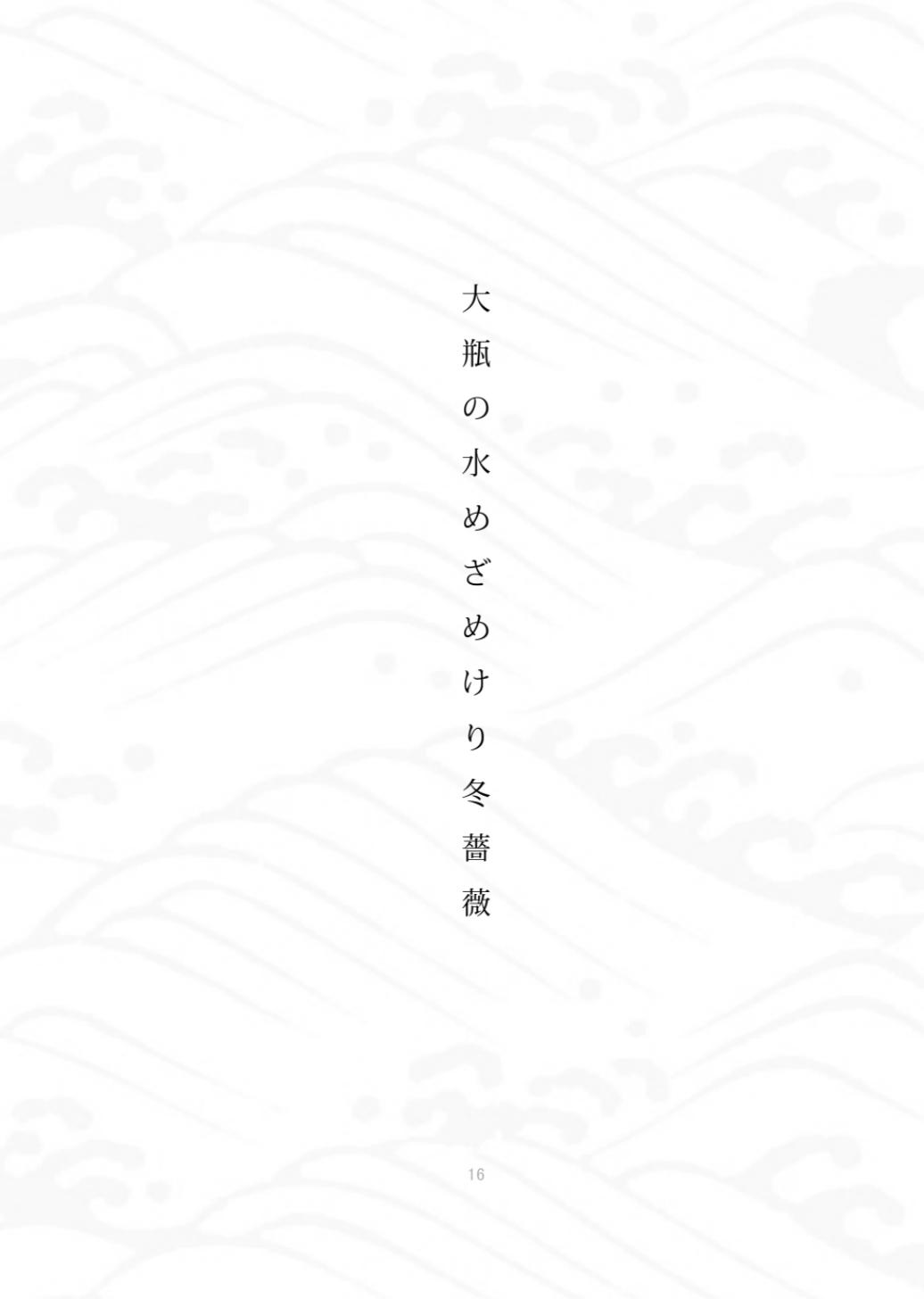
う
か
ら
や
か
ら
少
な
く
な
り
ぬ
お
正
月



湖
氷
る
音
の
な
か
行
く
棺
か
な

雪しんしん読み返しゐる罪と罰

風
花
に
小
さ
き
駅
の
灯
り
け
り



大瓶の水めざめけり冬替薔薇

冬桜
ふくみ
笑ひ
がど
こか
から



看
護
婦
の
ひ
と
り
の
机
冬
灯

先生が猫を蹴とぼし春隣



煮凝のかさごは武者の姿せる

寄り添ひし寒木瓜の紅母の墓

二

月

うす紅き落葉松の芽は空に溶け





地
上
げ
跡
荒
れ
た
る
ま
ま
に
建
国
日

やはらかく髪編む少女木の芽風





ものの芽のもあーつと頭蓋に生えてくる

梅
の
花
指
入
れ
て
み
る
弾^た
丸^ま
の
痕





海を打ち打ち
据ゑ若布洗ひをり

末黒野の土やはらかく犬の糞





月

上
げ
潮
の
三
月
十
日
橋
に
立
つ

ふうはりと笠智衆ゆく彼岸道

春の雷裸像の乳首に触れてみる

水
温
む
波
が
水
押
し
流
れ
ゆ
く

落つときもつらつら椿つらつらと

踏
切
の
音
絶
え
間
なし
初
燕

本願寺聖路加病院涅槃西風

鶏
小屋
に
は
と
り
一
羽
春
の
泥

蠅
あ
た
る
音
の
し
て
を
り
春
障
子

ひとつ落ち水のさざめく紅椿

松
陰ふぐり
囊り
落
ち
子
雀
と
紛
れ
ゐ
し

四

月

京
言
葉
う
し
ろ
に
聞
き
ぬ
朧
月

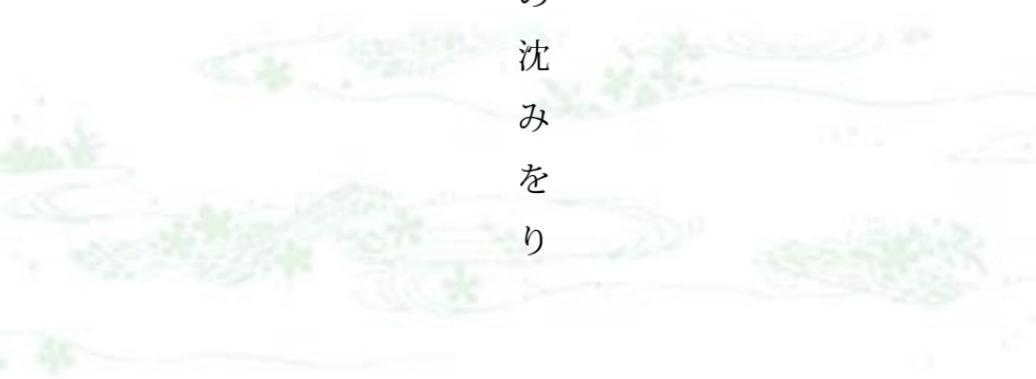
初
桜
白
手
袋
と
短
剣
と

たこ焼の焼けるを見てる四月馬鹿

ネクタイをきしつと締めて万愚節

半
眼
の
キ
リ
ン
の
貌
に
桜
散
る

山
葵
田
に
一
円
玉
の
沈
み
を
り



雑
木
山
そ
こ
だ
け
ぽ
つ
と
遠
桜

兜
立
て
身
は
白
波
の
桜
鯛



花
の
下
見
返
る
顔
の
の
つ
ぺ
ら
ぼ
う

太き注射打たれて
みたり花曇

硯
よ
り
春
の
朝
日
の
離
れ
た
り

藁
や
犬
と
猫
と
が
舐
め
合
う
て

身体中の骨抜けてゆき花の春

引出しの軽さ桜は咲き満ちる

山並の平らになりし
朧かな

鉄
塊
は
潜
航
艇
な
り
海
は
春

五

月

芍薬の包みきれざる花を解く

数輪の余花薄明を残しけり

ク
ラ
ス
会
神
田
祭
の
顔
に
な
り

作務僧の藍の匂へる樟若葉

煙草の火なかなかつかず新樹風

柿若葉かちりと切れし炊飯器

麦刈りて現る小さき軍馬の碑

藜
伸
ぶ
天
に
至
れ
る
杖
を
得
ん

六

月

子雀の弾みてゐたりえごの花

更衣母がうしろにゐるやうな

ス
ー
パ
ー
の
レ
タ
ス
の
中
に
青
蛙

藪蚊打ち荷風の墓に詣でけり

サルビヤの列まつすぐに捧げ銃

太宰忌や老いしまだムは魔女めきぬ

登り窯冷えきつてをり羽抜鶏

囿り 鮎傷 負ひて なほ 逸りけり

日
輪
の
ま
ろ
び
ゆ
く
な
り
青
芒

見上げては俯いてゆく木下闇

か
き
つ
ば
た
男
の
眉
の
匂
ひ
け
り

あ
が
き
ぬ
る
通
勤
電
車
の
窓
の
蠅

青葉茂り人間魚雷がらんどう

波の音近くなり来る五月闇

挙
手
し
行
く
肩
に
螢
の
光
り
け
り

墓
ひ
と
つ
離
れ
て
在
り
ぬ
青
嵐

著 莪の花夕べに蝶のまぎれぬし

杜
若
少
し
疲
れ
し
男
か
な

青葉風まつすぐ通る喪の座敷

水割つて翡翠枝にもどりけり

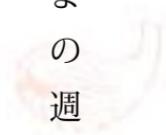
羽
拔
鶏
大
き
な
猫
を
追
ひ
回
す

女郎蜘蛛見上げ煙草の火をつける

七

月

花
莫
産
に
開
き
し
ま
ま
の
週
刊
誌





夏
帽
子
回
転
ド
ア
を
抜
け
て
く
る

炎天のこめかみきゆつと締めけり



The page features several faint, light-colored illustrations of fish and a shell-like object, scattered across the background. The fish are depicted in various orientations, some facing left and some facing right. The shell-like object is located on the right side of the page. The overall aesthetic is minimalist and artistic.

よ
し
き
り
の
声
を
攫
ひ
し
雲
の
峰

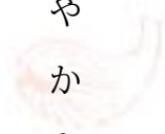
ふるさと
は東京
である
夏休





油
蟬
寝
転
ん
で
見
る
ヌ
ー
ド
集

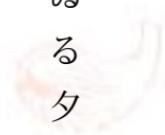
鎌倉の五山の風やかき氷

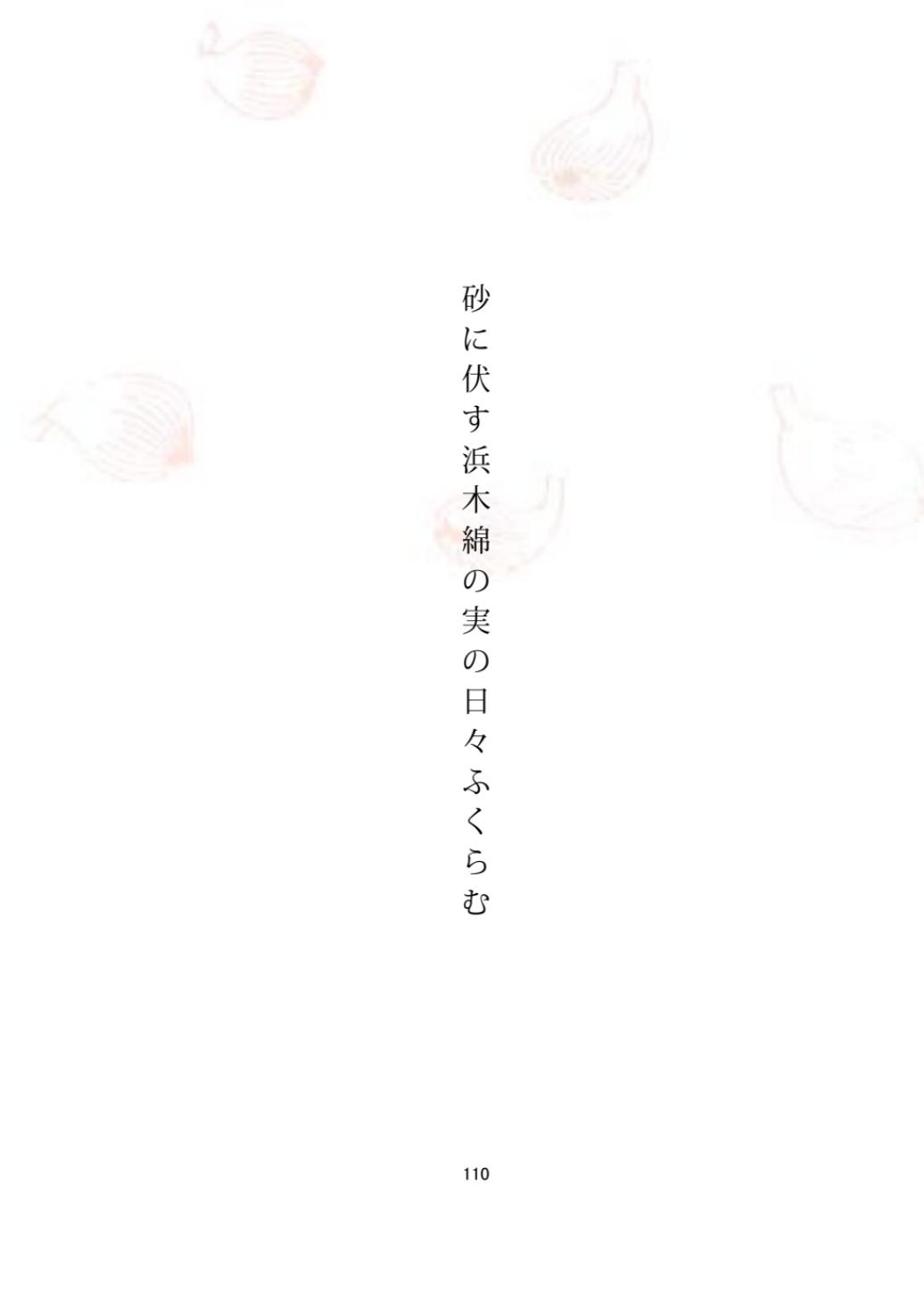




武
家
屋
敷
曲
り
角
よ
り
白
日
傘

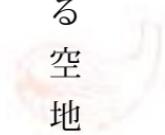
妻呼べば犬が来てゐる夕端居





砂に伏す浜木綿の実の日々ふくらむ

向日葵の刈り残しある空地かな





何も置かぬ机が一つ夏座敷

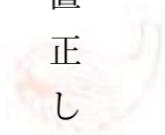
炎
昼
や
身
を
貫
け
る
影
の
あ
り





入道雲つかめば掴めさうにある

遠雷や座布団の位置正しをり





鉄
橋
の
電
車
点
れ
り
雲
の
峯

犬のゐる青水無月の無人駅





一
声
を
鳴
い
て
そ
れ
き
り
夜
の
蟬

月光に漂ふくらげ裏返る





月



天皇の
声聞き
取れず
雲の峯



兵
た
り
し
人
語
ら
ざ
り
八
月
を



作務僧の木に凭りてをる今朝の秋



蠍座の尾に跳ねられし流れ星



アルバムをすり抜けてゆく敗戦日



爪を噛み女の笑ふ鳳仙花



赤まんまひとり離れて男の子

The background features a repeating pattern of stylized rice plants and fish. The rice plants are depicted with long, slender leaves and fan-shaped panicles, rendered in a light, monochromatic style. The fish are shown in a simple, elegant outline, swimming upwards. The overall aesthetic is clean and traditional, typical of Japanese decorative arts.

稲
光
眼
の
無
き
魚
は
海
底
に



立秋の脳天に日の集まれり



尼さまの頭のへこみ秋暑し

九

月



死神をねじ伏せてみる鳥兜



桔梗の切絵のごとく咲きにけり



白桃を一剥きにして豊かなる



鶏
が
猫
を
追
ひ
か
け
曼
珠
沙
華



大鯉の抱かれて日比谷秋出水



鼻づらを撲たれし鮭のはらら子よ



半
跣
思
惟
の
形
を
し
て
み
る
虫
の
夜



月天心短銃
欲しとふと思ふ



生きものの中の一人の九月かな



旅
に
来
て
野
分
と
一
夜
す
ご
し
け
り



大花野犬に曳かれて迷ひける



こほろぎの跳び越してゆく欠け茶碗



野
分
晴
神
宮
球
場
の
鴉



十六夜の芒を括り直しけり



牛の尾を煮込んでをりぬ台風下



葉
鶏
頭
海
へ
か
よ
へ
る
一
本
道



水^{みな}底^{そこ}
の
魚
に
な
り
た
る
良
夜
か
な



背の高き人のあと行き吾亦紅



月

白鳥の
われに
寄り来
る秋の
湖





駅裏に今日は柿売る男かな

病
床
の
ひ
と
透
明
と
な
り
て
秋





犬は地を農夫は稲田見てゐたる

冬
近
し
簀
の
子
傾
け
魚
干
す





百舌鳥日和ひよいと地蔵にわが帽子

ひとはみな海に向きたる秋日和



これといふ仔細なけれど後の月

川底に夕日の残るもみぢかな



木道の果て
秋天のふと
ころに

秋草を摘み来て宿に叱られし



六つ目のむかごぼろんと食べこぼし

渡
し
船
一
人
を
乗
せ
て
秋
の
川





水脈とどく小島々々の秋のいろ

海の色見し目を返す紅葉山



こまごまと妣の家計簿ぬかご飯

五臟六腑曲りてをりぬ烏瓜



月

小春日や隣り合せに蒲鉾屋

白山茶花散るにまかせし小寺かな

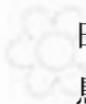
枯葉散るステンドグラスのマリア様

夕刊にはさまつてゐる枯葉かな

十二

月

真向へる白鳥笑ひたるごとし



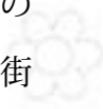
投げ出され大鯰青く反り返る



関
八
州
半
分
見
え
る
枯
木
山



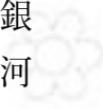
人
混
に
湿
布
の
匂
ひ
年
の
街



昼
は
昼
夜
は
夜
の
影
冬
木
立



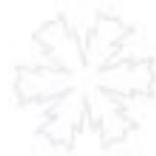
自
販
機
の
故
障
し
て
を
り
冬
銀
河



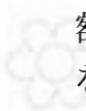
薄氷に映りし影を突つく鴨



筆
ペ
ン
の
ど
れ
も
が
乾
き
十
二
月



日向ぼこ額をぽんとぶつけたる



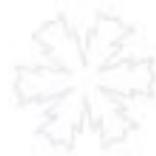
大雪になるかも知れず根深汁



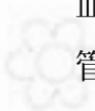
死といふこと怖ろしからず十二月



岩肌にはりついてゐる冬の滝



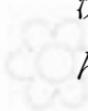
虎落笛血管ぐると動きけり



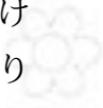
磯
焚
火
遠
く
で
男
見
て
を
り
し



人形の沈んでをりぬ冬の水



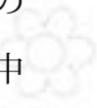
水鳥の水を揺らさず動きけり



山
宿
の
重
き
丹
前
牡
丹
鍋



冬
の
月
滝
を
離
れ
て
滝
の
中



岸に下駄脱ぎ揃へあり冷たからむ



余命なきことを知りつつ年用意



大つごもり浜火祭の火の粉浴ぶ



編
集
後
記

佐藤喜孝

句集名『糸つ』は著者、内藤糸つの本名でもあり俳号でもある。『獐』と『あを』では「悦子」という俳号であった。題字は親父のあつた高島茂氏の遺墨の中から採字した。

内藤糸つは、大正十三年一月十六日千代田区外神田にて父直作、母えづの五女として生れた。江戸ッ子である。

『小説倶楽部』・『それいゆ』・『TBSブリタニカ』等、出版界で活躍された。俳句は『雪嶺』など、いくつかの俳句結社で学んだようだが、最後に所属していたのは『貂』と『あを』であった。

平成十四年七月三十日午前〇時四十分東京都三鷹市の三鷹病院で逝去した。享年七七歳。墓所は台東区谷中一の五「妙情寺」。

深夜、病院から電話があり、妻とふたりでタクシーで駆けつけたが間に合わなかった。申し訳なかった。死因は原発性肝細胞癌。真夜中の病院から葬儀社の霊安所に安置しゆつくりと対面した。そろそろ町は白んでいた。病苦から解放された顔は元の健康なときの面影がよみがえっていた。私が携帯しているポケットウキスキイを目薬のように口元へ一滴二滴したらせた。顔色がふつと赤らんだように見えたのは私の錯覚であろうか。その時の糸つさんの現住所は

私の家になっていた。無情ではあったが笹塚の糸つさんのマンションを前年の秋引き払っていたからである。明け渡すその日、七〇六号室のマンションの重い鉄のドアを出てふと西の方を見ると、大きな白妙の富士山がでんと坐っていた。一瞬どきつとしたことを鮮明に覚えている。

それからあつという間に二年も経ってしまった。句集原稿をまとめ、糸つさんが師表と仰いだ川崎展宏先生にお願いしたところ、まことにこころよく序句を戴いた。お陰様で糸つさんに至上の贈物にこの句集はなつた。

冷酒のコップ新宿の灯を映し

の序句に添え、内藤さんは新宿に縁が深く、また酒好きの方でしたので……”とあつた。「序句の冷酒は「れいしゅ」ではなく「ひやぎけ」と読みたく存じます。」と添え書きされていた。

この句集は制作順に作品を並べていない。糸つ俳句の後半わずか十年ほどの資料なので月別に並べることにした。『獐』平成四年五月号〜平成九年十二月号。『貂』平成五年十月号から平成九年七月号。『あを』平成十三年一月〜平成十三年六月。その他ご一緒した句会などから私が一冊にまとめさせていただ

た。採り落とした句はないかと何回も、時間を置いて読んだ。いつまでも逡巡していてもしょうがないと芝尚子さんに背中を押されてやつとまとめる決心がついた。

一句一句糸つさんの分身である。ゆつくりお読み頂ければ編者としてありがたい。

ふるさととは東京である夏休

先にも書いたが糸つさんは神田の生れ。お正月とお盆は東京は静かである。本当の東京が戻ってきた、わたしの東京が戻ってきた感がある。夏休みには地方に故郷がある家族は里帰りをする。夏休・お盆の頃の仲間が少なくなつた一抹の淋しさを含めた一句。「東京である」という見得の切り方は爽快である。

行く春や故旧忘れ得べき高見順

糸つさんは職業柄文筆家と接する機会が多かつた。この句にも糸つさんは溢れる思い出があるのであろう。そのような縁で連句の世界に入つて行かれた。一九八七年七月五日、主にTBSブリタニカの人たちで巻かれた歌仙をご紹介

しよう。えつさんが本格的に巻いたはじめての歌仙である。

しろがね歌仙

西荻・田辺宅にて

しろがねに水辺の光る夏木立

朝子

岩にせかるゝ鮎のをどりて

悦子

蝉鳴きてにわか雨のあがるらし

尚子

小走りにゆくくるぶしの白

あや

月を背にビルの谷間の影法師

和子

夜霧おりきて街うるみたる

利子

萩の庭尼僧のひとり佇める

悦

恋に破れて嵯峨野あたりを

尚

ナナハンをとぼして思ひ断ちきれず

あ

巢立ちゆく日の髪飾り揺れ

和

山吹の枝をたわめて風渡る

利

春の愁ひの遠きまなざし

朝

公達の酔ひて候おぼろ月

衣紋くつろげ七三に居る

顔見世の席華やぎて幕あがる

ガラス越しなる天皇一家

連れ立ちて妻の見上ぐる残花かな

蔵の中なる古雛の顔

春寒し少年の愛ひそやかに

読み古したる「仮面の告白」

舞踏会更けゆく冬の銀河かな

マスク外して笑みうつくしき

夏瘦や夢二描くの風情なり

ぐびりぐびりとビールあほれり

思はずも本音吐くなり春の宵

未練残りりリラの香のなか

もう男なんかこりごりしゃぼん玉

蒼空に消ゆ赤き風船

尚 朝 利 和 尚 悦 朝 利 和 尚 悦 朝 利 和 尚

月高く吾もETになりたしや

悦

長き夜をばもてあまし居り

あ

芋の露遠嶺の影をこぼしけり

利

ゆるく結びてかの人を待つ

朝

わらべうたお夏の恋や昼夜帯

悦

うつつなく舞ふ春霞かな

尚

人去りて萼くれなぬや花の後

あ

詠み納めたる高樓の春

和

酒と酒を飲む空間・時間を繋つさんは好まれた。そこにはいつも人が居る。人が好きなのである。さびしがり屋なのである。酒と人、どちらが欠けても困惑するのである。ひとりしづかに飲む酒など考えられないことである。

元日の不機嫌な顔洗ひけり

あまりものを食べてない本格派の酒飲みであるが、私のやっている句会では、

手作りの料理を結構食べて飲んで話して頂いた。川崎展宏先生の序句を読んでみると賑やかな酒場の人の間で楽しそうに話し飲んでるベレー帽のゑつさんの顔が澎湃と浮かんでくる。当のゑつさんかというと意外と酒の句が見当たらない。やつと一句、

酒場の灯弥生の風の冷たさに

がある。にぎやかな紅灯の巷というより淋しげに赤提灯が揺れている店のようだ。ゑつさんの内面を垣間見る思いがする。

大正十三年生というと太平洋戦争と青春がもろにぶつかった世代である。

兵たりし人語らざり八月を

戦争を知らない世代と違い、ゑつさんには具体的にありありと「兵」は肉体を持っていて。八月を「語らない」ことにより戦争への深い思いをこの兵とともに共有している。

ゑつさんの俳句世界をわずかの句を頼りにご紹介した。この句集は私よりより深くゑつさんと交流のあった方々にお読みいただく句集である。多言無用と

いうところである。

冬桜ふくみ笑ひのどこからか
挙手し行く肩に螢の光りけり

これら晩年の俳句は『あを』の句会に出句されたものである。そのときどきこれらの俳句に接して私は、えつ俳句に何か変化の胎動が起こっていると感じた。無限の遠くを見る眼差しを感じた。えつ俳句の、のこる者たちへの挨拶句であろうと思えてならない。

世に五十肩という病がある。毎週一回悦子さんの所に病院通いをしていた。むかしの流行り歌を私が歌うと悦子さんもうれしそうに歌っていた。その時は本当にあかるい顔になる。雀百まで踊忘れずではないが歌はいいものだとしみじみ思った。三鷹病院は吉祥寺の駅からバスに乗る。下りるときは降車ボタンを押す。ある日、体をひねってボタンを押したら肩がズキつといたんだ。それから右手を伸ばしたり吊革に掴まるのが難儀になってしまった。あれから二年、もう治らないと思っていたら最近薄紙を剥ぐように痛みがなくなってきた

た。きつとこの句集が上梓される頃には完治しているかも知れない。五十肩の痛みと共に悦子さんも遠くへ行ってしまうような気がする。ずっと痛みがのこっけていてもよいような心持ちになっている今日この頃である。

(平成十六年十一月三日記)

内藤ゑつ句集

ゑつ
つ

竹僊房

平成十六年十一月二〇日印刷

平成十六年十一月三〇日発行

著者 内藤ゑつ

発行者 佐藤喜孝

印刷 藤美印刷

製本 コニタ製本所

発行所 竹僊房

東京都中野区中央二一五〇一三

電話 〇三二三三七一―四六二三